

講 座

フロイトは何を遺したか

—フロイトの復権(7)—

布施 裕二

【キーワード】 精神装置, 外界, 内界, 自我, 超自我

第三部 理論的収穫

第八章 精神装置と外界

いよいよ「精神分析学概説」の最後となる「第三部 理論的収穫」である。フロイトの遺稿の最後が、どのような展開となるのか、そこでの「理論的収穫」とは何かを見て行きたい。まずは次の文章から始まる。

「いうまでもなく、われわれがこの論文の第一章で示した精神分析学による一般的認識や前提は、すべて根気よく、辛苦した個々の研究を積み重ねて獲得されたものであるが、われわれは前章において、その見本として一例を述べた。今やわれわれは、そのような研究によってどんなに知識を豊富にすることができたか、また今後の進歩のためにどのような大道がひらかれているかを概観したい衝動を感じる。」(199頁)

第一章というのは「精神装置」であり、第一部「精神の本質」の初めである。それらは積み重ねられた研究の結果として得られたものであり、それを踏まえて前章では、神経症の成り立ちについて説かれた。そこから本章では、これまでの成果や今後の展望について、より一般的に見るとというのが、この章の目的であるようである。「今後の進歩のためにどのような大道がひらかれているか」である。

「われわれの取り扱う現象は、単に心理学だけに属するものではない。それはまた器質的・生物学的側面を持っているので、精神分析学を築き上げる努力をつけてくる間に、われわれは、重要な生物学的発見をも行なったのであって、新しい生物学的仮説を設定することは避けられない。」(同)

フロイトは治療的経験によって、性的本能論の立場に立つこととなった。その本能は、心理面としても現れるが、基本的には生物学的な側面を強く持つものである。それゆえ、当然の如く、生物学に立ち入らざるを得ない。そこをフロイトは強調しているのである。

我々の立場からすると、認識とは脳細胞に描かれる像であり、当然に身体的なあり方に影響し、身体的側面から影響を受けるものであり、フロイトの言う「生物学的」観点も当然必要となる。けれども、フロイトの立場では、精神と身体とが明確に区別されていて、彼の精神の究明が、身体の生物学的なあり方にまで見方が広がったと、自らの業績を評価しているのである。

「しかし、当面、心理学の領域にとどまることにしよう。われわれは、精神的な正常と異常の間の境界を立てることが科学的には不可能であり、この区別が臨床的な重要性を持つものであるにもかかわらず、ただ方便的な価値しか有さない、ということを確認

した。こうしてわれわれは、正常な精神生活をその障害の面から理解するという権利を基礎づけたのであるが、このことによって、これらの精神病や神経症などの病的状態が、病原体のような特異的な原因を持つものであると考えることは許されなくなる。」(同)

心理学のあり方として、精神的な正常と異常とは科学的に明確に区別できないゆえに、正常な精神を異常なあり方から理解することが可能であり、精神の病的状態は外的な特別な原因で起きるものではないという。あくまで内的な原因、正常と異常に貫かれる問題が大事となり、そこに性的本能論が関わってくることになる。

精神的な正常と異常の区別が、明確につけられないのは、性的本能論からすると当然である。本能のコントロールの仕方次第だからである。すなわち、自我による本能のコントロールが出来ている場合は正常で、そうでない場合が異常であり、その境界は明確でない。異常から正常を見ていくというのは、自我のコントロールの乱れたあり方の要因を探り、それが乱れないあり方にも共通していると見ていくのである。

我々の立場からすると、人間を社会生活を営む存在と捉え、精神的な正常というのは、社会生活を営める認識のあり方で、社会的規範をまともに踏まえて生活できるものである。それが出来ないのみならず、そういう自分の認識を変えすることも出来ないのを異常と言う。それらが、どのような生育過程・生活過程で創られたのかを問題にしていき、その問題を解決していくのが治療である。

「睡眠中に一時的にあらわれる、無害な、いやむしろ合目的な機能を営みさえする精神障害(夢)に関する研究は、永続的に存続し、人生にとって有害な精神疾患を理解する手がかりをわれわれに与えてくれた。さてここでわれわれは、意識心理学が、精神の正常機能を、夢を理解する以上によく理解す

る力を持つわけではないとあえて主張したい。」(同)

夢の研究は大いに意味があったと述べている。それは特に精神疾患を理解する上で役に立ち、意識心理学の理解が及ばないところだという。

夢を精神障害とするのは、以前(第五章 夢解釈の説明)に見た通りである。夢の中身が取りとめもなく予想外で、自分でコントロール出来ない、という意味でのことである。夢が本能に規定されているとすれば、昼間に生じる精神障害と、それほど違いはないことになる。根は同じで、違いは夢が「無害な、いやむしろ合目的な機能を営みさえする精神障害」ということである。すなわち、夢は周囲に大きな悪影響をもたらすものではなく、目が覚めれば止むという意味で無害であり、夢により本能満足が得られたり、本能に関わる情報が得られたりする意味で、合目的となる。

もちろん、現代の精神医学では、夢を精神障害とは捉えない。夢はあくまで夢である。それは睡眠の程度を、生理学的に見るための指標になっている。けれども、夢を睡眠中の脳細胞の活動として捉え、そこに像の形成も見られると捉えるならば、日中の精神活動や、自身が気にしている内容、身体のある方などが、不確かな形ではあれ、そこに現れることが起こり得る。特に、身体の状態の悪い時には、怖い夢となって現れ、それが余計に精神や身体を働かせることも悪くすることもある。夢は、精神や身体を働かせる見るバロメーターになる。しかし、それを「精神障害」とまで捉えることは出来ない。あくまで眠っている時の精神活動だからであり、目を覚ましての社会的な精神活動ではないからである。

「われわれは仮説を立てて、精神装置というものは空間的な拡がりを持ち、合目的に組織化され人生の要求に応じて発達してきたもので、ただ特定の場合、一定の条件のもとにおいてのみ意識という現象を成立せしめるものだ、と考えた。」(200頁)

本能論に立つ者として、精神の根本には本能があり、それは意識出来ないものが大半であるとする。精神を営む場を精神装置と設定し、精神発達には精神装置の発達であるとする。そこにおいて意識というのは、あくまで一時的な現象ということになる。これがフロイトの精神についての見方である。

ここに「精神装置」という機械論的な見方の限界が出ている。それは認識の発展(精神の成長)を認識自体の展開から捉えられず、あくまでも基盤である精神装置から説かねばならないからである。本来、認識は脳細胞の一つの機能として、外界の像を結んでいき、その像が徐々に展開・発展していく。それが精神の発達である。そのダイナミックさを、機械論ではどうしても説くことが出来ない。それゆえ意識についても、「一定の条件のもとにおいてのみ」という、条件を付けることにもなる。しかしながら、意識という精神活動もまた、成長・発達していく像の活動なのである。

「科学的研究によって、われわれの根源的な感覚的覚悟に基づいて明らかにされた研究結果は、外界に存在し、しかもわれわれの思考の内界においてその信頼すべき再現、反映が実現されたさまざまな関連性、従属関係について得られた洞察である。またそれに関する知識は、なんでも外界にあるものを『了解し』、予見し、できることなら、それを改変する能力をわれわれに与えてくれる。」(同)

外界にある対象が、内界においてどのように再現・反映され、それにどのような関連性・従属関係があるかを究明してきて、そこで得られたことで、外界にあるものを了解・予見するのみならず、外界を変えようとしたという。精神分析療法で得られた成果である。ここでの内界は、先の精神装置であり、「精神装置と外界」という、この章のテーマとなる。

ここでも精神装置で人間の精神を扱うゆえに、認識発展の流動性を捉えられない現実が見られる。再現・反映したものの関連性・従属関係を知ることで、外

界のあり方を了解するという態度は、一見科学的なものに見える。しかし、外界からの反映した像は、絶えず変化発展するものであり、決して固定したあり方にはなっていない。それらの関係を探るにしても、固定した関係ではなく、変化する関係として捉えていく必要がある。それは「知識」として固定化されるものではなく、変化・発展する理論である。

「このエスの中に身体的な『本能』が活動している。これは二つの根元的な力(エロスと破壊性)がさまざまな割合で混合したものから成り立っており、種々の身体器官や器官系統に対する関係によってそれぞれに分化している。これらの本能の唯一の志向(活動目的)は外界の対象の助けをかりて、各身体器官に特定の変化を起こさせることから得られると期待される本能満足を求めることである。しかし、エスが要求するように、急激でがむしゃらな本能満足は、しばしばきわめて危険な外界や環境との葛藤を惹起するであろう。」(201頁)

エスの中には性的な本能と破壊本能が存在しており、それぞれが身体器官に分化して、そこに変化を引き起こすことが本能の満足となる。エスは本能満足をひたすら求めるが、それを急激でがむしゃらに行くと、外界の現実との間に問題を引き起こしてしまうので、そこをどう乗り越えるかがテーマとなる。

このように説くのは、現実的な問題が存在するからである。それは性的満足を求めすぎ、犯罪などにより社会問題化することである。社会には規範が存在し、現実の社会を乱す行為は罰せられる。フロイト流に言えば、男児が母親に男性器を向けるとすれば、父親からの罰としての去勢威嚇が待っている。また、破壊本能によって自らの身体を傷つけることも、社会的には許されない行為となる。それらの行為を、どのようにコントロールするかを、フロイトは問題にしているのである。

けれども規範の問題は、社会生活をどのように円滑に送るかの問題であり、幼児期から、親を初めと

する周囲の人間によって、守るべきものとして創られていく認識の問題であり、単に性的な行為や破壊的な行為だけを問題にするわけではない。それゆえ、人間の社会規範の一般的なあり方から、性的な行動や破壊行動を規制する規範を見ていくことが大事であり、もっと広く大きな観点から問題にすべきものと言える。

「エスは快感原則に厳格に従属する。しかし、これはエスだけではない。他の精神領域の活動も、せいぜい快感原則を修正することができるだけであって、それを廃棄することはできないように思われる。」(202頁)

エスは、あくまで快感を求める。精神装置の部分として、もっとも根本的にある本能部分として、それは当然である。本能を満たすことによる快こそが大事で、そこから派生する他の精神分野も、その根本的な基底から外れない。

これがフロイトにおける、人間の根本的な見方であることは、これまで何度も見てきた。本能を満たすことこそが、人間の根本的な目的である。その意味で、他の動物とあまり違はない。ただ、人間社会は動物の群と比べて、複雑になっているだけである。規範などにより、本能の満たされ方が規制されることで、各種の精神の病が出てくるという。

しかし人間とは、本当にそのような存在でしかないのか、本能と闘うだけの存在なのか。それが満たされないと病になるという、まことに単純な存在なのか。そこには社会生活を営み、人間社会を発展させていくという、人間本来の歴史的なあり方が、正面に据えられていない。あくまで動物から続く本能が、人間の行動を決めるものとなっている。

「他の精神領域は、いわゆる『自我』と称せられる領域であって、われわれはそれを一番よく知っていると感じているし、またその中でわれわれ自身を最も早く認識する。これはエスの表層から発達して

きたものであって、その刺激受容と、刺激遮断の機構によって外界（現実）と直接交渉を営んでいる。自我は意識的知覚から発して、しだいにエスのより広い範囲、深い層へと影響をおよぼしてゆきながらも、強固な外界への依存性という形で自己の発生の由来を標示する消しがたい刻印を示すのである（たとえば『ドイツ製』というように）。」(202頁)

ここで、外界に向き合う自我という精神領域が登場する。外界を自覚するのは、この領域とされる。それはエスに由来するものであるが、外界の方からの影響を受け、その影響をエスに及ぼそうとする。外界に強く依存する特徴があるという。

ここに描かれている自我は、外界に対して「刺激受容・刺激遮断」という機能を持つ、正に機械的な反応を行うものである。外界からの刺激を受け入れるか、遮断するかという受身的な働きしか持っていない。基本的には、積極的に外界に働きかける自我ではない。

ここにもフロイトの人間の見方が現れている。あくまで本能に縛られて、そこから自由になれない存在として、外界をどう受け止めるかが、人間の自我の課題というものである。積極的に歴史を創り変える存在では、決してありえない。

「またその統合作用は、本能要求とそれを満足させる行為の間に、思考活動を介入させる。この思考活動は、現在の状況を認識し、これを過去の経験に照らし合わせて、試験的行動によって自分の意図した企ての成果如何を検討・予測しようとする。このようにして自我は、本能満足を得ようとする試みを遂行すべきか、それとも延期すべきか、あるいは一般的に本能要求を危険なものとして抑制すべきかどうかという現実原則に従った決定を下す。」(202頁)

自我には思考という働きがあり、それによって本能満足をどのように行うか、過去の経験を踏まえ、現実のあり方に沿って検討していく。遂行するか、

延期するか、それとも抑制するかの判断を行っていくという。

ここでは自我のより積極的な機能として、思考活動が説かれている。現在と過去と比べ、自分の本能満達が妥当かどうか、試しながら判断していくという。ここでの自我の働きは、あくまで本能満足の判断を行うものである。エスから創られたとされる自我であるから、それは仕方のないこととも言えるが、何とも淋しい自我の働きであると言える。本能を離れた自我の積極的な働きは、フロイトにおいては存在しない。フロイトの自我も、そのようなものであったのか。もっと積極的なものではなかったのか。

「自我はエスが無視しているように思われる自己保存の役割を果たしている。自我は、不安の感覚を、自己保全を脅かす危険を通報する信号として利用する。記憶痕跡は知覚と同じように、特に言語系との結合によって意識化され得るものであるが、この精神過程は、現実誤認を生ずる惧れのある（過去と現在の）取り違えの可能性を含んでいる。自我は『現実検討』の機構によって、自己をこの取り違えから防衛するが、この機構は夢の中では、睡眠状態という条件に従って消失する。」(202～203頁)

ここでは自我の自己保存の役割を述べている。自我は、不安という感覚を、自己保全を脅かす信号として利用し、過去の記憶も意識化するが、その記憶が間違ふことがあるので、あくまで現実を検討することで身を守る。けれども、睡眠中はその機構が働かないという。正に、機械的な防衛機構である。不安を危険信号として使い、記憶を参照し、その誤りを正すための機能もついているが、あくまで目が覚めている時しか働かない機械装置である。

しかし、不安というのは、そのような種類の認識なのであろうか。本能を満たすことへの不安にしか生じないものなのか。様々な日常生活場面で生じる不安は、すべて本能欲求と結びつけねばならないのか。それほどまでに本能に縛られて生活しているのか。我々

からするとそう言えないことも、フロイトの立場では、そう言わざるを得ない。

「すなわち、自我は二つの領域で闘っているのであって、自己保全に対する攻撃で直接自我を脅かす外界と、あまりにも多くの本能要求を掲げて自我を脅かす内界とに対して、自我は自己の存在を防衛しなければならない。自我は両者に対して、同じ防衛方法を使用するが、内部の敵にたいする防衛は特に不完全である。」(203頁)

自我は大変である。外界から自我が脅かされることに対応するのみならず、内界の本能欲求にも脅かされる。特にエスの要求は、自我が元々エスから生まれたゆえに大変である。

自我はいつも戦っていなければならない。外界は自我を脅かすものでしかなく、内界は本能を満たせと激しく迫る。自我に安息の時間はない。確かに、神経症患者の生活は大変かもしれない。内界は乱れて不安で一杯だし、外界の生活もうまくいっていない。その意味で、神経症患者の自我のあり方としては（本能要求のところを除けば）妥当と言えるかもしれない。しかし、それを人間一般の自我のあり方として普遍化すると、問題となる。外界は自我にとって、いつも脅かすような存在とは言えない。社会という外界は、時には自我を護り、自我の働きを必要とするものである。

「外界から与えられる危険に対しては、子供は両親の保護によって守られる。子供はこの保護状態に（無意識的罪悪感を抱き、これを償うために）自分が両親から見棄てられて外界の危険に直接曝されることにならないかという愛情喪失に対する不安という形でこれを実現する。この因子は、男の子が去勢の威嚇によって根本的にその自己愛が損傷される脅威を強められるエディプス・コンプレックスの状況に陥ったとき、その葛藤の成り行きに決定的な影響を及ぼす。」(203頁)

外界からの危険に対して、どう身を守るか。子どもは自分で自分を守りきれないので、親に頼るしかなく、そのことが去勢威嚇の恐怖を増していき、エディプス・コンプレックスの状況にも影響を及ぼすという。

ここで大事なのは、子どもが危険を感じる認識も、周囲によって創られていくということである。つまり、自分が親に見捨てられる不安というのも、初めから存在するものではなく、親との関わりによって創られていくものであり、そこに親の育て方が関わってくるのである。それは子どもを育てる親の認識（自身の親からの育てられ方を含め）が大きな位置を占めており、そこを問わないで、本能だけの問題にすることは出来ない。子どもに甘すぎたり、厳しすぎたりするという現象のみならず、子どもの頭の中（認識）を見て育てているか、自分の思いだけで育てていないか、ということが問われてくる。

「こうして、生物学的観察は、幼児期における性的興奮を防衛する課題に自我は失敗した、その当時の自我は、未成熟だったためにそのような能力を与えられていなかったと説明せざるを得ない。リビド一の発達に比較して、自我の発達がこのように遅延しているという点に、われわれは神経症の本質的な発生条件を見出すのであって、幼児期の自我をこの課題から解放してやるならば、つまり多くの原始人が行っているように、幼児期の性生活を自由に放任しておくならば、神経症の発生は避けられるかもしれないという推論を否定することはできない。おそらく、神経症的な疾患の原因論は、ここで論じたよりも一層複雑なものであろう。」（204頁）

自我の発達が未熟な幼児期において、性的な興奮をうまくコントロール出来ないことが、神経症発生の本質的な条件であり、原始人のように幼児期の性生活を放任すれば、神経症発生は避けられるかもしれないが、もっと複雑な原因論が存在するだろうという。

本能論の立場からすると、性的本能をコントロールしにくい幼い自我の幼児期に、大人になってからの病の原因があることになる。そこでうまくコントロールする自我を創らないと、性的問題が本格的になる大人の時期に、自我が本能をコントロールしにくい病の状態になるからである。しかし、性的本能だけでなく、破壊本能も後に提示せざるを得なかったフロイトにとって、幼児期の性生活だけに原因を求めることも出来にくい。

ただ、ここで唾然とするのは、原始人の幼児期の性生活が自由放任だと断言しているところである。何をもちてそう言えるのか、その根拠も示さずに述べている。しかしながら、原始人には原始人なりの規範（社会的な決まり）があるはずであり、子どもを育てるにも全く自由放任だとは考えにくい。それでは社会を発展させることは出来ないからである。というのも、大人は自分達の生活を子どもに伝えるのみならず、それを発展させるように教育していくからである。どんなに原始的に見える社会においても、自然の変化に合わせて生活を営んでいく認識を発展させており、それがなければ社会として存続はできない。それゆえ、性的な本能にしても、その社会なりの規制が、幼児期から行われているはずである。少なくとも、現代人の祖先である原始人は、そうである。フロイトの社会についての見方が、すごく低いレベルにあることは、見逃してはならない。

「直接的満足から遠ざけられた本能要求は、その代理満足へと通ずる新しい回路をとることを余儀なくされるのであって、この回り道を経る間に性的な性質を失い、その本来の本能目標との結びつきが弛緩してくる。このようにして、われわれは、一般に高い評価を受けているわれわれの数多くの文化的財産も、『性』の犠牲の上に、性的本能能力の制限によって獲得されたものである、と見解を明らかにすることができる。」（204頁）

直接的な性的満足を断たれると、本能要求は性的な性質を失って別の道を辿るのであり、それは文化

的財産を創る方向であるという。

文化遺産というものが、性的要求の代理満足だと言われると、ちょっと驚くが、フロイトの立場に立てばそうなると分かる。フロイトにとっては、幼児期の性的満足がどのようになされるかで、その後の精神の営みが全て決まってしまうからである。すなわち、性的要求の満足こそが人間の精神の原点であり、性的な要素を持たないように見える精神の営みは、性的性質が抜けたもの＝代理満足という図式がそこにある。

ここにもフロイトの人間観が現れている。本能に縛られ、そこから自由にはなれない存在としての人間である。確かに本能的な要素は大事なものだが、そこから相対的に自由に働ける脳細胞の働きこそが、他の動物とは異なる人間の特徴であり、それが人間特有の文化を築いてきたという点を忘れてはならない。

そして、フロイトの人間観のもう一つの大きな特徴は、人間を社会の中の一員として捉えるよりは、個人としての人間という面を大にしていることである。個人が自己の本能を満足させることを、社会全体のあり方よりも優先させている。これには、フロイトの生きた時代背景（「個人主義」の芽生え）も影響しているかもしれない。

「精神病発病の機会は、現実が耐えられぬほど苦痛なものになるか、あるいは本能が異常な強さにまでたかまるのかのいずれかであり、この事実は、自我に対して対立的な要求を突きつけるエスと外界の両者が自我に与える影響は両者とも結局は同じ結果を生むという臨床的経験と見事に一致する。」（204頁）

精神病発症の原因は、外界の圧力が強いのか、内界の本能欲求圧力が強いのか、そのどちらかであるという、極めて単純な結論である。本能論を基盤に置くと、本能要求が強すぎて、自我が本能コントロール出来ないことと、外界が厳しすぎて自我がそれに耐えられなくなることが、精神病の原因となる。ここで、

精神病はあくまで個人の資質の問題となる。個人の本能が強すぎるか、外界の圧力に耐えられないほど弱いものか、いずれかで精神を病むのである。そこには社会関係の問題もなければ、本能以外の身体上の問題もないゆえ、治療も個人に対する外界の圧力を弱めるか、本能を弱めるかのいずれかとなる。これでは精神病を「素質」という観点で捉える、旧来のあり方と大きな違いはない。

「回復後の患者の報告によってわれわれは幻覚的錯乱状態（アメンチアAmentia）のような外界現実から非常に隔たった状態においてさえも、一人の正常な人間が彼らの心の片隅に潜み隠れていて、あたかも事件に加わらない観察者のように、病気の亡霊を傍観し、亡霊が通り過ぎてゆくに任せていたのだ、という事実を知るのである。」（205頁）

精神病で意識が障害されているように見える状態でも、精神は外界を全く映せなくなるわけではなく、自分のあり方を客観的に見る働きが残っているという。

精神病の種類や程度にもよるが、精神の働きが、外界を全く映せなくなるわけではないのは確かである。しかし、それは何故なのかが問題である。単に、一部の患者がそう述べているからというのでは、あまりに経験主義的である。認識を外界を映す像と捉えるなら、その像の発展により、自己をも外界として客観視できる精神になると見れば、たとえ病的な精神の状態に置かれても、自分を客観的に見つめる頭は働くこともあると理解できる。

「これらすべての症例で起こったことは精神の『分裂』であるという考えを、おそらくわれわれは一般に妥当するものとして推論することができよう。たった一つだけではない、二つの精神的態度が形成されたのである。一つは現実を考慮に入れる正常な態度であり、他は本能の影響のもとに自我を現実から離反させる態度である。この二つの態度は互いに並存する。結果はその相対的強度いかにかかっている。

もし後者の方がより強かったり、強くなったりすれば、これで精神病の条件が与えられたことになる。この関係が逆になれば、一見したところ妄想性疾患 Wahnkrankheitが治癒したような状態が生じる。」(205頁)

先の患者の報告で分かったことを踏まえ、精神の「分裂」が説かれている。それは現実を考慮に入れられる正常な精神と、本能によって現実から離反させられる精神の対立したあり方とである。後者が強ければ精神病になり、そこで前者が強くなると一見治癒したような状態になるという。フロイトによれば、あくまで自我は本能の変化したものであり、現実を考慮に入れるという働きも、本能が強くなれば、たちまちその機能を失うという、まことに危ういものなのである。

けれども、そのような自我は、幼いころより他人との関係で削られ、成長発展していくものとしてある。幼い頃は、食欲や睡眠などの本能に支配されていても、成長するにつれ、それらから相対的に自由になっていく。その結果、「不眠・不休」「食事も忘れて」などの状態が生じることになる。自我が本能から影響されにくいあり方になり、身体のある方が不健康なものとなり、それが精神病の発症の要因になることもある。外界を映す脳細胞の働きが、まともに行われなくなることによる。

「すべての精神病には『自我の分裂』が存在すると仮定する見解は、実はそれが他の状態、たとえば神経症においても同様にあてはまり、結局は神経症に対しても妥当なものであることが明らかにされなければ、さして多くの注目を要求する資格をもたないかもしれない。はじめ私はこの見解を『フェティズム崇物症』の症例によって確信した。」(205頁)

精神病に当てはまる「自我の分裂」という観点は、他の精神の病、特に神経症でも当てはまり、フロイトはそれをフェティズムで見つけたという。フェテ

シズムというのは「愛する相手が身につけている靴・下着などの物や、髪・手足などの肉体の一部を性的対象とする性愛の在り方を指し、性対象の倒錯の一つに含まれる。」(「精神分析事典」422頁 岩崎学術出版社2002) というものである。ここで「自我の分裂」というのは、現実の外界としては単なる物だと分かっている、本能に影響された自我は、それを愛する対象と捉えてしまうということである。人間の認識の発達によって、そこまで像を膨らませられるのであり、その人の育ち方・生活の仕方、そのような精神になることもある。

「フェティズムの対象を作り出すということは、自分が去勢不安から逃れるために、去勢の可能性の証拠となるものを破壊しようとする意図から起こる。もし女性が男性と同じようにペニスを持っているならば、われわれは自分自身のペニスの保持に関して(喪失)の不安を感じる必要はない。ところがわれわれは、フェティズムでない人々と同じように去勢不安をつのらせ、同じようにそれに対して反応するフェティストに出逢う。つまり彼らの行動には二つの対立する仮定が同時に表現されている。一方で、彼らは女性器にペニスを見出さなかったという認識の事実を否定するが、他方では女性にペニスが欠如していることを承認し、そこから正しい結論を引き出してくる。この二つの考え方は、彼らの全生涯を通じて相互に影響し合うことなく並存し続ける。これが『自我の分裂』と呼ぶものである。」(206頁)

フェティズムの目的は、女性に男性性器があることの確認であり、その場合、女性に男性性器があると思込む精神と、女性には男性性器がないと認める精神とが並存することがあり、それが「自我の分裂」の証拠だという。現実をしっかりと見られる自我と、頭の中で想像を膨らませ、それを現実と見る自我の両方の存在である。フロイトによれば、女性の身に付けている物を性的対象にするのは、それを男性性器として確認するからだという。

このように、あくまで男性性器と、それを失うことの恐怖にこだわるフロイトであり、そこでの女性の存在は、あくまで男性の性器に保証を与えるものでしかない。その意味で、ここでも男性優位の時代背景があり、その男性社会にうまく適応した生活できない人間が、精神的に病む人間とされる。

「われわれが今まで述べてきた自我の分裂の事実は、最初に考えたほど新しいことでも奇妙なことでもない。個人の精神生活の中で、特定の問題に関して形成された、相互に対立し合いながらしかも互いに無関係に独立した二つの態度が成り立つという事態は、神経症の一般的な性格であって、ただその場合、そのうちの一つは自我に属し、他の対立するものは抑圧されてエスに属するのである。」(207頁)

自我の分裂の事実は珍しいことではなく、個人の生活での問題において、対立した精神のあり方として存在し、それが神経症にもあり、一方は自我に属し、他方はエスに属するという。外界を現実的に見ることが出来る自我と、エスという無意識によって影響される自我との対立である。それが神経症の根本問題だという。

我々の日常生活において、外界を脳細胞に映し出しているながら、自分の内界に影響され、誤った認識になることがある。思いこみや錯覚という認識である。その場合、すぐに誤りが訂正できるから、日常生活に支障を来すこともない。しかし精神病や神経症といわれる認識では、内界のあり方が強まって(エスのせいではない)、外界をまともに捉えることが出来なくなってしまう。こうなると日常生活に支障を来すことになり、治療の対象となる。精神病では自分が病であることに気がつかないほど、外界の反映が出来なくなっているが、神経症では「自分がおかしい」という見方がまだ出来ている。その違いがある。

「ただこの論究の終わりに当ってわれわれは、これらすべての現象のうちの僅かなものだけが意識的

知覚によってわれわれに知られるのであるという事実を指摘しておく必要がある。」(207頁)

本章の最後は、このような文で終わっている。これまで述べてきたことは、意識的知覚として知られるうちの、僅かなものだけというのである。ということは、フロイト以降の人間が、フロイトの成し遂げたことを含め、更なる新たな究明を行っていけば良い。

第九章 内界

最後の未完の章である。前章の「外界」と対応させての「内界」で、何が説かれていくのか。まずは自我の概念について、次のように説いていく。

「自我はエスと外界の間を媒介し、前者の本能要求を引き受けて満足させ、後者についてはさまざまの事物を認識してそれを記憶として役立てる。自我はまた自己保存のためにエスと外界双方の側からの過度に強すぎる要求を防衛し、さらにその決定にあたっては、すべて修正された快樂原則の支持によって導かれる。このような自我の概念は、本来ただ早期幼児期の終り頃(五歳頃)までの自我に対してのみ妥当するものである。そしてその時期に至って一つの重大な変化が行なわれる。外界の一部分は、対象としては少なくとも部分的に放棄され、それに代わって(同一化によって)自我の中に取り入れられる。つまりこの外界の対象は内界の一構成部分となるのである。この新しい精神領域は、外界の人々が果たしていた機能を受け継ぎ、自我を観察し、自我に命令を与え、自我を裁き、刑罰で脅かす。これは全く両親と同じであり、両親の役割を引き受けたのである。われわれは、この領域を『超自我』と名付け、その裁判官的な機能によって、これを『良心』と感ずるのである。この超自我が、実際の母親も現実的にはそのように振る舞わなかったような厳格さをしばしばあらずという事実は注目に値する。」(208頁)

ここでは自我の発達が発達が説かれている。五歳頃までの自我は、エスと外界からの要求に対して、バランスをとるように働いていき、それが主として快を得ることに導かれている。五歳頃になると自我に大きな変化が生じる。超自我の形成であり、それまで両親が果たしていた役割が、内界の一部として創られていき、それで欲望をコントロールしていく。

フロイトの本能論からすると、自我は本能から創られたものであり、その自我が外界の影響を受けて変化したあり方が、超自我となる。すなわち、五歳頃になると、自分で自分を律することが出来る精神の働きが加わり、単純に快を追求するあり方とは異なっていく。これもまたフロイトが経験的に得たものであろう。

しかしながら、そのように自分を律する認識は、五歳頃に急に出来るのではなく、それまでの生活の積み重ねとして徐々に創られていくのである。しかも、それは両親だけの影響によるものではなく、周囲において自分に働きかけてくれる、多くの人々からの影響を受けることで創られていく。それらの影響により、自分なりに自分の行動を規制する認識となっていく。その創られ方によっては、親以上の厳しい認識として創られることにもなる。しかも、それは性的欲望だけを律するのではない。

「事実、超自我はエディプス・コンプレックスの相続者であり、そのコンプレックスが解決を見た後ではじめて現われるのである。したがってその過度の厳格さは、現実の原型（すなわち両親）から由来したものではなく、エディプス・コンプレックスの誘惑に抗して費やされる自我の防衛の強度に対応する。」（208頁）

超自我はエディプス・コンプレックスの解決の後に見える相続者で、超自我の強さは、エディプス・コンプレックスの誘惑に、自我がどれだけ強く抵抗したかによるという。

母親への愛着と父親への敵対という問題（特に去

勢威嚇に対して身を守る）を、どのように解決するかで、自分の欲望を律する精神が創られていくという。あくまで本能の解決の仕方が、超自我形成につながると、フロイトは捉えていくのである。

けれども、自己を律する認識は、エディプス・コンプレックスが現れるという三歳以前の生活過程から創られていく。すなわち、親の働きかけによって、子どもが自分なりの動きが出来るようになると、「こうした方がいい」とか「こうしてはいけない」という行動の規制が行われるようになる。物の食べ方や飲み方、遊び方、親や他人への関わり方など、様々な行動の規制が行われていく。その中で子どもは、自分なりに行動を律する術を覚えていき、五歳頃には自分なりに行動をコントロール出来るようになる。それは三歳頃の、いわゆる「第一反抗期」と呼ばれる、自己主張の盛んな時期を経てのことである。

親や周囲からの働きかけは、単なる言葉かけだけでなく、時には無理矢理な強制でなされていくこともある。それが度を越すと「虐待」という現象になったりもする。そのような積み重ねで創られた認識が、自分に対し過度に厳格なものになったりすることもある。

「自我が超自我と完全に一体となって働く限りは、その両者のあrawれを区別することは容易ではない。しかし、両者の間の緊張や疎隔ははっきりと認めることができる。良心の呵責による苦悩は、子供時代の両親の愛情を喪失する不安が道徳的な精神領域へと転化した結果生み出される。他面、もし自我が、超自我の気に入らないことをしたり、誘惑に対抗してその排斥に成功すれば、自我は貴重な収穫を収めたかのように、自負心の高まるのを感じ、その自尊心を強める。こんな風にして、超自我は、内界の一部となってしまうにもかかわらず、なお自我に対しては外界の役割を演じつづける。」（208頁）

自我と超自我とが一体として働く場合、その区別がつきにくい、良心の呵責による苦悩は幼児時代

の体験から来るもので、両者の緊張関係は存在するという。他方で、自我が超自我に反した行動をとったり、自ら誘惑を排したりすることで自尊心を持ったりもする。自我にとっての超自我は、内界であっても外界の役割を果たすという。

内界としてある超自我が、自我に対してどのように働くか、それに対して自我がどのように振舞うかが述べられている。フロイトにとっての超自我は、あくまでエディプス・コンプレックスの名残であり、両親に対する関係が色濃く残っていると捉える。それゆえ、内界にあっても、あくまで外界であるかのように振舞うことになる。

しかし、超自我を、人間の発達過程に生じる規範的なものと捉えるなら、それがどのような発達過程で得られる認識であるかと捉えるなら、もっと見方が変わってくる。それは性的なものに留まらず、人間の社会生活に必要な規範（きまり）を、自分の頭の中に得ることである。初めは確かに外界から強制させる、その意味で外的なものだったが、次第に知らず知らず規範に沿って行動できる、内的なものになっていく発達過程がそこにある。

「強いて大まかなわりあて、素描的な分類を試みるならば、個人が両親から分離した後に身を曝す外界は、現在の力をあrawし、遺伝されたさまざまな傾向を伴ったエスは、身体的な過去をあrawし、後になって附け加えられる超自我は、何よりも、子供が幼児期の数年間のあいだに追体験せねばならない文化的過去をあrawす、ということができよう。」（209頁）

外界は現在の力、エスは身体的な過去、超自我は文化的過去を表すものだという。

フロイトにとって、現在の外界を生き抜いていくには、身体的な過去である本能の元、文化的過去である超自我をもって自我をコントロールしていくことが大事となる。これがフロイトの出した最後の結論である。

もちろん、現在を生きるために、過去を踏まえて生きるのは当然であるが、現在を未来につなげていく生き方こそが、人間の歴史的なあり方と言える。フロイトには「未来」という言葉が出てこない。

「超自我という概念の設立によって、われわれはいわば、現在が過去に転化される精神過程の実例を経験するのである。」（209頁）

現在が過去に転化された精神過程の実例が、超自我という概念だという。

フロイトの立場からすると、本能が全ての根本であるから、自分を律する精神として現在ある超自我も、遠くは本能に由来するものとなる。エディプス・コンプレックスの後継であり、過去からのものである。

確かに過去から創られてきた規範的な認識は大事である。けれども、現在属する社会においても、守るべき規範はあり、それに縛られながら生活している。そこでどのように新たな規範的な認識を創っていくか、それによって社会で自由に生活していくか、これこそ未来に向けた自分の生活と言える。

ここでフロイトの文章は終わっている。彼にとっての内界は、超自我が支配するものである。エスと超自我、この二つによって、我々の人生は規制されているということであり、それがフロイトの「発見」（特にエディプス・コンプレックス）と言える。我々には、この発見を更に発展させていく責務がある。

引用文献

Freud, J., 小此木敬吾訳：精神分析学概説（フロイト著作集9所収）、人文書院、1983

Lecture

What Academic Achievement Did Freud Leave ?

—Restoration of Freudian Theory— (7)

Yuji Fuse

【Key words】 psychic apparatus, external world, internal world, ego, superego